湯沢町におけるチャレンジ21教育推進運動は…

佐藤守正

湯沢町のチャレンジ21の平成十一年度スタート校である二つの小学校を訪ねてみた。地域住民で組織するとされている「チャレンジ21推進委員会」がどのように機能しているかをお聞きするということが、主たる目的であった。

(1) 三俣小学校

「我が校はスムーズにこの運動に入っていけましたよ。」と、この活動の責任者である教頭はおっしゃる。三俣小はその昔三国街道の宿場であった山あいの小集落の、全校児童十五名、教職員は七名という極小規模の学校である。「運動会、文化祭など何をやるにも地域住民と一緒でないとできない所、チャレンジ21が求める地域の教育力の積極的な活用ということは、我が校の教育実践の当たり前の姿です。今年の秋の遠足はチャレンジ21もあったので、地域全体に呼びかけて、たくさんの親やお年寄りと一緒に旧三国街道を通って平標山までハイキングをしました。途中の史跡や自然をお年寄り達から説明してもらいながら歩きました。」と校長も語る。

とりあげた分野は、一応「社会の変化に対応した知識技能の習得と問題解決能力の育成」だが、「この地域の狭い社会に暮らす子どもたちの目を外に広げ、広い視野から三俣と自分のくらしを見つめることのできる

子どもを育てる」という取り組みにしたいとのこと。

チャレンジ21のスタート校に指定されることはわかっていたので、新学期早々計画作成。一・二年生（複式）は「地域を知る」ための「三俣探検隊活動」。三・四年生は「三俣なんでもマップ」と題して「地域の自然・歴史・人材などを地図に表す活動」。五・六年生は「過去と未来の三俣」、宿場町として栄えた過去を学び将来を展望する学習。

推進委員会も四月から組織。メンバーはＰＴＡから正副会長と母親委員代表、地域から学校後援会長、公民館長、そして校区の四つの集落から学校のために役立ちたいとすすんで名乗りを上げていただいた方各一名の、合計十名と学校職員全員。学校の計画が一応できたところで委員会を召集し、計画を提示して意見を聞いた結果、多少の手直しをおこなったとのこと。

かねてから、運動会、文化祭、夏祭りなど地域総出で行う行事の相談のために地域合同会議というものが組織されており、メンバーも一部重なっていることもあって、推進委員会はスムーズに動きだしているという、まずは理想的なスタートを切った地域と言っていいだろう。あとは、学校の教育計画に提言し教育活動に積極的に係わっていこうという地域の人材を育て、地域にその雰囲気を作っていくために、学校側とくに管理職がどのような姿勢をとっていくかにかかっていよう。

ひとつ気掛かりなこと。この三俣地域は清津川ダムの水没地域に指定されている所である。建設省の計画によれば、学校はもちろんこの校区の住民はすべて移住しなければならないとされている。計画が発表されてからすでに三〇年、その間地域住民は応ずるべきか否かでもめつづけ苦悩してきた。最近の公共事業の見直しという動きの中で、結論を急がなければこの計画はつぶれてしまう、という推進派からの圧力はいっそう強まっている。

「五・六年生の、過去と未来の三俣の学習の中でのダムについての反応はいかがでしょうか？」の問いに対し、教頭さんは「それに触れると面倒なことになるので、なるべく触れたくないし、今のところ子どもたちからの発言もありません。それにダム受入れと決まっても、着工までは一〇年もかかるのでしょうから…」と答えている。

親達の念頭から一時も離れることがない問題を、そ

して子どもたちも当然知っていて気にかけているその問題を避けて通る学習でいいのだろうか。

(2) 湯沢小学校

各学年二学級と障害児学級の計一三学級、児童数二八〇名ほどだが、湯沢の小学校五校の中では一番大きな学校である。

校長はチャレンジ21運動の問題点を率直に語ってくださった。

「校長を集めての県の説明会が四月にあった。それを受けて職員に説明し、合意を作りながら計画を立てる。学校の方向が決まらないうちは推進委員会に諮ることはできないから、一学期中には委員会は開けなかった。

二学期に入ってすぐ推進委員会を招集したが、今までの協力の仕方ではいけないのか、どこがちがうのかという質問がたくさん出たきりで、委員の皆さんは何のことかよく理解できないようだった。町内会長や民生委員など地域の住民から五名、PTAの役員から九名の委員を委嘱したが、学校の仕事のお手伝いだとしたらもっと具体的な仕事としていいつけてほしいという反応がほとんどだったと言ってもいい。チャレンジ21の方向は賛成だ。しかし地域の方の理解を充分作ってからの参画でなければ、教育現場は混乱するだろう。

校長を集めての県の説明会の会場で、ある校長が、作文のうまい職員がいるところは幸せだなとつぶやいて周囲の笑いをかっていたが、そういう受け止め方をしている現場が多いのではないだろうか。

うちの学校はこのシリーズ(いきいきスクール以来)が始まってから八〇〇万円の予算をいただいたが、全県のその予算を、例えば教員の定数を増やすというところに使ったらどうだったかと考えてしまう。…」

チャレンジ21は総合的な学習活動の中でなんとか消化するから、とにかく毎日の授業に集中させて欲しい、計画と報告書作りでエネルギーをさかれるのはごめんだ、…そう思っている教員は多い。

県教委のこの方針が県の押し付けと受け止められている間は、管理職と一部の指導的な立場にあるとされる教員の間だけの「チャレンジ21」で終わってしまうのではないだろうか。

(さとうもりまさ・湯沢町議会議員)